

2015年10月25日 礼拝メッセージ

聖書：第一ヨハネ2章12～17節

説教：あなたがたの罪は赦されました

1 世を愛してはいけないのか

1) 「人生にヨロコビを」

15節に「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません」とあります。16節には「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものです」ともあります。ここだけを読むと、クリスチャンはデパートに行つてはいけないのだろうか。服を買ったり、おいしいものを食べて楽しんだりしてはいけないのかと窮屈に感じる方もおられるでしょう。きょうはその所から考えてまいります。

毎週通っている北海道聖書学院の道筋に大きなパチンコ屋さんがあります。交差点の角にある大きな建物ですので、赤信号で止まると店の看板が目に入ってきます。その看板には、「人生にヨロコビを」と書かれていました。「ヨロコビ」が漢字で書かれていないところになにか意味がありそうです。これを見て私は二つの事で妙に感心をしました。一つ目は、店の経営者は、来られたお客さんに喜びを与えることができる。そういう自信を持っているらしいということ。二つ目は、人々がパチンコ店に通うのは人生の喜びを求めてであるという事実です。パチンコ屋さんと教会を一緒にするのは少々乱暴かもしれませんが、教会はどういうところですかと問われたなら、人生に喜びを与えるところであると言うことはできると思います。ならばパチンコ屋に象徴されるこの世が提供する「ヨロコビ」と信仰を通して神からいただく喜びとはどこが違うのでしょうか。

2) 世と世の欲は滅びる

17節。「世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。」世が提供する喜びは一時私たちを楽しませてくれるかもしれませんが、結局いつか滅び去ります。信仰のない人であつてもだれもが心の中で気がついていきます。中には、開き直すようにして、どうせいつかは死ぬのだから元気なうちに精一杯楽しまなければ損だと考える方もいます。でももしそうであるなら、人はいったい何のために生きているのでしょうか。どんなに楽しんだとしても結局最期は死んでおしまいです。世と世の欲は滅び去ると言われるとおります。パチンコ屋さんに行つていつきは喜びがあるかもしれませんが、でもいつか終わりの時がやってきます。それでおしまいです。

一方それとは反対に、「神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます」とあります。ただ長生きしますという意味ではありません。この世では得ることのできない大きな喜びをもって永遠に生きることができると言っています。

2 神のみこころを行う者

1) パリサイ人、律法学者たちはイエスを殺した

では、神のみこころを行う者とはいったいだれのことでしょうか。何をすることが神のみこころを行うことであるのか。自分は神のみこころを行っているのか、と心に不安を感じている方もいるでしょう。でも、神は私た

ちに重荷を負わせる方でしょうか。5章3節から5節を読みます。「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」

福音書に登場するパリサイ人、律法学者と呼ばれる人たちは、神の律法をことごとく守らなければならないと教えていました。ところがイエスは、彼らは自分では何もせず、人々に重荷を負わせて苦しませていると言って徹底的に非難しました。その結果、パリサイ人律法学者は、神の子であるイエスを十字架に追いやって殺してしまいます。

これは何を教えているのか。パリサイ人律法学者は、神の律法を生懸命努力して守れば、努力した分だけ神に近づくことができると考えましたが、実は逆である。一生懸命努力すればするほど、神の子イエス・キリストを殺す側に走るようになった。だから、そうなるはいけないと教えています。

奇妙な言い方に聞こえるかもしれませんが、これは大変うれしいニュースです。というのは、ここにお集まりの皆さんは努力とか一生懸命何かを言うことが大変苦手な人が多いのではないか。だいたい私自身がそうです。一生懸命努力することは危険であると言われると、実に心が楽になります。

2) イエスを神の御子と信じる者(会堂管理者ヤイロの場合)

苦しい努力をするのではないと言うのなら、ではいったいどうすることなのか。結局、私たちがやるべきことはただ一つ。「イエスを神の御子と信じる者」となる。これひとつ

です。最初、なにが神のみこころなののかととまどったかもしれませんが、結論は実に簡単です。

その実例を挙げてみましょう。マルコの福音書に会堂管理者ヤイロという人が出て来ます。一人娘が死にかけているので、今すぐ家に来て娘に手を置いてもらいたいと、ヤイロは頭を地面にこすりつけてイエスにお願いをします。イエスはこれを聞き、すぐにヤイロの家に向かうのですが、途中いろいろなことが起きて手間取って遅くなってしまいます。ようやく歩き始めたと思ったら、ヤイロの家の者が走ってきて「お嬢さんは亡くなりました」と知らせます。ヤイロはこれを聞き、「間に合わなかった」と感じ、絶望したでしょう。父親として娘を助けることができなかったことで自分を責めたでしょう。そのときイエスは言われました。「恐れなくて、ただ信じていなさい。」娘が死んでしまったのに、いったいなにを信じろと言うのか。おそらくヤイロはとまどったはずです。信じろと言われても、信じられないというのが現実だったでしょう。このあとイエスはヤイロの家に入り、死んでいた娘を生き返らせました。

死んだ者が生き返るからあなたは信じ続けなさいと言われて、「はいそうですか」とすぐに信じられる人はまずいません。ヤイロもそうでした。しかしそれでもよかったのです。全部信じろと言っているのではない。ただ、イエスに「助けてください」とお願いしたのなら、どんなに最悪の状態になったとしても、あとのことはすべてイエスがしてください。ただ私たちは信じて待ち続けなさい。信じる者こそが神のみこころを行う者であると言っています。

3 いま書き送ること、かつて書き送ったこと

1) あなたがたの罪はすでに赦されている
ではイエスを神の御子であると信じた者はどんな恵みをいただいているのか。ヨハネは、「子どもたちよ」、「父たちよ」、「若い者たちよ」と言葉を換えながら、三つのことを伝えようとしています。まず12節をわかりやすく訳し直します。「私は次のことをあなたがたに書き送ります。あなたがたの罪は、主の御名によってすでに赦されています。」

イエスを神の御子であると信じた者は、その瞬間すべての罪を赦していただいている。このことは何度も聞いています。信じて受洗したとき、多分私の罪は赦されたのだらうとは思いますが、しかし、その後のことが問題です。救われてから何度も罪を繰り返してきています。一度や二度くらいなら赦してくれたかもしれないが、「仏の顔も三度まで」と言うくらいです。私は今まで数え切れないくらい罪を犯し続けてきた。そんな私の罪は赦されているのだろうか。いやだめかもしれない。

聖書はなんと言っていますか。「あなたがたの罪は、主の御名によってすでに赦されています。」主が罪を赦しますと言われたのなら、いったいどこまでの罪を赦したと思っていましたか。あなたが生きてきたこれまでの罪は赦した。けれどもこれから先の罪はまた別です。と言うのでしょうか。それなら、私たちはなんども洗礼を受ける必要があります。洗礼は一度つきりでもよい。なぜ一度でいいのか。私たちのこれから犯していく罪もすべて先取りして赦してくれているから。そういうことです。

2) すでに神を知っている

二つ目は13節にあります。これも言い直します。「私は次のことをあなたがたに書き送ります。あなたがたは、初めからおられる方をすでに知っています。」

初めからおられる方とは主イエス・キリストです。でも、私たちはこの方をすべて知っているのでしょうか。とても知っているとは思えません。でもそれでよいと言うのです。実際、あのヤイロもそうでした。ヤイロがひれ伏し、お願いした相手がいったい何ものであるのか、実はヤイロ自身、ほとんどわかっていない。わかっていないのにイエスはヤイロの願いを聞き届け、娘を生き返らせていきました。後になってからヤイロは自分で願った相手がどれほどすばらしい方であったのかに気がついていきました。キリストは神の御子ですと告白しようとしても、この方のごとくわからないから、とちゅうちょされる方もおられるでしょう。その気持ちはわかります。しかし、わからなくても困ったらこの方をお願いしてよい。そうしたら後でわかるから。そのような順番です。

3) すでに悪い者に打ち勝っている

そして三つ目は13節の後半。「私は次のことをあなたがたに書き送ります。あなたがたはすでに悪い者に打ち勝っているのです。」

この世はいろいろは方法を使って私たちに誘惑してきます。弱い私たちはなんども誘惑され、なんども罪を犯してしまいました。とても罪に打ち勝ったと言えるような状態ではありません。それなのにヨハネは言うのです。「すでに悪い者に打ち勝っている。」ジョークでしょうか。あるいは、打ち勝つはずだと、やはり努力しなさいと言っているの

か。ちがいます。私たちが犯すすべての罪がすでに赦されていると言いました。どんなにこの世の悪が私たちに誘惑したとしても、主の救いがすでに与えられています。悪は私たちをもう滅ぼすことができない。神のみこころを行う者、すなわち、キリストは神の御子であると信じる者は、永遠のいのちの中にとどまります。

その約束をわたしたちはすでにいただいています。この約束が取り去られることはありません。目の前に何が起きたとしても、突然に苦しみの中に突き落とされることがあっても、主は言われる。「恐れなくて、ただ信じていなさい。」

デパートに行つてはいけないと言っているわけではありません。おいしいものを食べてはいけないとも言っていない。イエスも食事を楽しみました。けれどもイエスはこの世が与える喜びよりもはるかに勝る喜びを与えてくださっている。そのことを覚えていきます。